

その 118

ちょっと振り返ります

その 11 にひふみ神示 4 の読み解きに書きました。

この心の宇宙はアイウエオというバイブレーションが闇の中に存在しております。心の構造を言っています。言霊ウは最初に芽生える意識の何もない空なる宇宙から意識の芽が出来てくる。言霊ウと名を付けました。そしてそれは人間の（欲望）を示すことになりました。その一点が動いて思考が働くと言霊ア（自分・主体）と言霊ワ（相手・客体）に心の宇宙が分かれます。言霊アは思考が働くとき（感情）が芽生えます。

言霊ワは主体の働きに反応するだけの側を指します。つまり純粹の客体です。（主体が客体を見て着ている服は何色かなと心で思うと、赤色であると言うことを答えるのは、客体からの情報です。）人間の頭脳の中に主体側と客体側が存在しています。波動を出す主体側、それに答える客体側です。この区分けを主体側の言霊はアイウエオ、客体側の言霊はワキウエヲと名付けています。それによってお互いに感応同交して認識が一致し。そうだね赤い服だねと認識できます。

言霊アのつぎに芽生える意識は言霊オ・ヲ（経験知）と名付けられました。経験をして知識として集積して、より快適な、効率的な、楽しい物を目指す為の学問・科学等がこの経験知に属します。

次に芽生える意識が言霊エ・エ（実践智）と名付けられた意識です。人間は迷うと葛藤します。今からどうしようか、自分の給料を（欲望）主体に仕事を決めればいいのか、好きなもの（感情）を仕事にすればよいか、両親の言う（経験・学問）的に仕事を決めればよいか、岐路に立たされます。どの宇宙も実在しますから内側の心が自分に訴えかけてきて決まりません。この時言霊アが発生したときの意識に戻ります。つまり何も意識がはっきりしない出発点です。つまり全てのしがらみを零にしてご破算します。そこでどうしようかなと考えるとき言霊エ・エ（実践智）が働き始めます。

極端なことを言えば今 50 億の借金を抱えてしまった。生きて行く望みを失うほど絶望します。この時は人は経験知（言霊オ）が働きます。親戚・知り合い・自分の月給等等全て考えても到底返済は無理、家族の生活も養うことが出来なくなり・・・と生きる望みが絶たれます。しかし全てを心の中で、ご破算にして言霊ア（感情・愛と慈悲）に立って、今・此所をどうしようかと考えたときに思い浮かぶ行動に従って判断し行動すると、つまり選択するとき、実践智（言霊エ）選択の知恵が働き言霊オ（経験・学問・科学）を超えた世界が広がり、何時の間にか 50 億の借金は返すことが出来るようになるとのこと

次に言霊イ・これは神の領域、人間の意志を下支えして、思うに任せて行動するとき全てが神性（かむながら）に現われ出てくる世界。

それを前提にその 11 を読んでみてください。

その 11

ひふみ神示 4

氣と言霊で読み解きましょう

「キつけてくれよ。キがもとざぞ、キから生まれるのざぞ。心くばれと申してあろが、心のもとキざぞ、すべてのもとキであるぞ、キは^①（よろこび）ざぞ、臣民みなにそれぞれのキ植えつけてあるのざぞ、うれしキはうれしキこと生むぞ、かなしキはかなしキこと生むぞ、おそれはおそれを

生むぞ、喜ばばよろこぶことあると申してあろがな、天災でも人災でも、臣民の心の中に動くキのままになるのぞぞ。この道理分かるであろがな。爆弾でもあたると思へばあたるとのぞぞ、おそれるとおそろしいことになるのぞぞ、ものはキから生まれるのぞ、キがもとぞ、くどくキづけておくぞ」

「キがもとぞぞ、キから生まれるのぞぞ。心くばれと申してあろが、こころのものはキざぞ、すべてのものはキであるぞ。キはよろこびざぞ、臣民みなそれぞれのキ植えつけてあるのぞぞ。」

キは「よろこび」と言っている。

神の歡びが光となってキ真善美愛となって現われるという言葉の思い出してください。われわれの心のもと（直靈）は歡び＝神の歡びなのです。

キ、真、善、美、愛＝言靈イ（意志）、言靈オ（知識）、言靈ウ（欲望）、言靈エ（叡智）、言靈ア（感情）、 に対比する

（参考までに言靈ではこころの住処は五次元 アイウエオです。進化の過程から順に言靈ウ→言靈オ→言靈ア→言靈エ→言靈イ それで重なり合っているお寺の五重塔は心の住処「家」の語源です。五つに重なる五重^{いゑ}です。下の階からウ→オ→ア→エ→イ の宇宙になって、真上から見ると重なり合っている。進化は一番下からウの宇宙から最後最上階のイの宇宙の構造になっている。）

もとの文にもどり キを意志に書き換えると

「意志がもとぞぞ、意志から生まれるのぞぞ。心くばれと申してあろが、こころのものは意志ざぞ、全てのもとは意志であるぞ。意志はよろこびざぞ、臣民みなそれぞれの意志植え付けてあるのぞぞ。」

となります。

「古事記と言靈」島田正路著より 言靈から説明すると 意志はイ イ（イ）ザナギ・イ（イ）ザナミのイ イは親音と呼ばれています。

父韻はイの段（キシチニヒミイリ）を指しローマ字で書くと、Ki Si Ti Ni Hi Mi Yi Ri ですが厳密に言いますとK, S, T, N, H, M, Y, Rで発音できません。リズムなのです。そこで親であるi（イ）が発音できるように支えています。（イは人間が生まれると、と父韻にくつつき動き出します。）

日本語の不思議はとんでもないことが秘められている言語です。

こころはコロコロ変わりつかみどころがないものと思われていますが、人間の心の使い方は4通りしかありません8個の父韻の並びでそれが決まります。並び方は自分から相手にこころを伝えるときの意志の変遷を示します。

① チキミヒリニイシ 天照の配列 言靈エを住処にする人

② チキリヒシコイミ

月夜見の配列 言靈オと言靈アを主に住処にする人

③ キチミヒシニイリ

須佐之男の配列 言靈ウと言靈オを主に住処にする人

④ キシチニヒミイリ

言靈イを住処にする人 時所に置いて配列を自由に使う 神 釈迦 老子 キリスト等

で8個の父韻全体でも意志（意志の変遷として使われ）言靈イと混同しがちですが注意ください

父韻（リズム） K, S, T, N, H, M, Y, R が母音（もとの宇宙に存在して只あるだけでそれ自体では動き出さない）アイウエオ（a, i, u, e, o）に働きかけてか（ka, Ki, Ku、・・・）か、き、く、・・・と子音が生まれ 日本語の五十音が完成します。

その一音一音を「言霊」といいます。

キとは（創造神）意志つまり父韻を指します。父韻が働かないと母音はうごかないのです。

8 個あり＝八卦＝八正道＝ヤハウエイ＝八幡様 などとして世界に伝わっています。この父韻を創造神＝神と呼びます。

こころは、アイウエオの五つの次元に住んでいます。バイブレーションとし存在している。

その父韻のことをここではキと表現しています。

「うれしキはうれしキことを生むぞ、かなしキはかなしキこと生むぞ、おそれはおそれを生むぞ、喜べばよろこぶことあると申してあろがな、天災でも人災でも、臣民の心の中に動くキのままになるのぞぞ。この道理分かるであろがな。爆弾でもあたると思へばあたるとのぞぞ、おそれるとおそろしいことになるのぞぞ、ものはキから生まれるのぞ、キがもとぞ、くどくキづけておくぞ」

意志に置き換えると

「うれし意（志）は嬉しいことを生むぞ、かなし意（志）はかなしきこと生むぞ、おそれは（おそれを意すると）おそれを生むぞ、喜べば（よろこびを意すると）喜ぶことあるともうしてあろがな、天災でも人災でも、臣民の心の中に動くキ（意）のままになるのぞぞ、この道理わかるであろがな。爆弾でもあたると思へばあたるとのぞぞ、おそれるとおそろしいことになるのぞぞ、ものはキから生まれるのぞ、キがもとぞ、くどくキづけておくぞ」

天災も人災も、心の中に動くキ（父韻の構成のまま＝言霊）のまま、爆弾でもあたると思えばあたると言っている。

言霊からみると、こころが選んだ言霊（言葉）のひびきがバイブレーションとなって同調するものを引き寄せることになる。

キは意志の 8 個の父韻のことを指します。つまり言葉の生まれるもとなのです。創造神です。神と呼ばれ崇められたものなのです。

ひふみ神示の別な箇所書かれてあることに「☺（神）は言葉ぞ、言葉はまことぞ、息吹ぞ、まこととは、まつり合した息吹ぞ、言葉で天地濁るぞ、言葉で天地澄むぞ、戦なくなるぞ、神国になるぞ、言葉ほど結構なこわいものないぞ。」

があります。以上のことがわかればこの意味は理解できると思います。

・ ・ その 119 に続く

次は神と呼ばれる父韻について

その 119

母音半母音の説明は終わりました。心の宇宙の闇にあるバイブレーションです。つぎに説明する

のが人間の生まれたときに働き始める創造知性である八つの父韻です。父韻は知性のリズムです（別な表現をすると人間の意志の働き方八種類です。）古事記では天の浮橋と言いました。表徴しているのが神社の鳥（十理）居です。自分（主体）と相手（客体）を鳥のように飛んで言葉（言霊）を伝え運ぶからです。

闇にあり動かない母音の波動と父韻（火花のようなリズム）が掛け合うと、（霊駈り＝霊が駆けて伝わる様＝光り）

子音（現象を創造するエネルギーの力が現われます）つまり人間が頭脳で思えば霊駈りが走り現象が現われると言うことです。

ただこの現象を起こすには法則があります。武道家が無意識のうちに行っている心の状態になること、何も考えていない、つまり言霊ウが芽生えようとするその状態（空）に戻ることです。下肚に心が鎮まり空の状態＝鎮魂帰神の状態（植芝先生）＝臍下の一点に心を鎮める（藤平先生）＝中心帰納（平井先生その高弟の成田先生）＝中心力（塩田先生）同じ事を言われています。

その状態での思いは氣の流れが現われる。

一般的には落ち着いてリラックスしていることと表現されています。

何故何がそうするのが「古事記と言霊」島田正路氏著書に書かれています。

それが父韻の正体です。神と呼ばれています。 ヤハウエイ＝八幡様＝八卦＝八正道等に伝えられています。

⇔ ⇔ ⇔

霊駈り＝光りの正体です。

これまでのおさらいから

母音・半母音

広い宇宙の一点が活動初めて、言霊ウアワオヲエエという宇宙が次々に剖判して来た処までお話しが進みました。

それらの言霊はそれぞれ頭脳の先天構造の中の実在であって、それ自体は決して現象として姿を現わすことが無いものでありました。例に母音であるウアオエをそれぞれ発音してみてください。息の続く限り「ア—」と同じ声が続きます。それは時間の上でも空間上でも無限であることを表しています。

さて今までに確認された先天構造内の言霊ウ・アワ・オヲ・エエを主体と客体（私と貴方）に分けてみましょう。主体側のアオエの母音と客体側のワヲエの半母音とが区別されます。言霊ウは主客未剖ですから主客の区別はありません。今便宜上主客に分けられなかった言霊ウを主も客もウと考えて主体側をウオアエ、客体側をウヲワエとして対立させますとウ⇔ウ、ア⇔ワ、オ⇔ヲ、エ⇔エの対立について考えて見ましょう。そのそれぞれは対立している、といってもウオアエ、ワヲウエの一つ一つは「独神で、身を隠している」実在ですから、それ自体はじっと静まりかえっているばかりで、自分から何らの行動も起こすことがない存在です。ウ ウ ・ア ワ ・ オ ヲ ・ エ エの対立と言っても、私と貴方の両方共互いに後ろ向きに立って、眼を閉じ、耳を塞ぎ、互いに相手に全然気がついていない時と同じ状態と言ってもよいでしょう。これでは私と貴方との間で何の交渉も起りようがありません。交渉がなければ何の出来事も起りません。私と貴方が互いに向き合い、眼

を開けて耳を澄まして相手に注意を払うようにするには何かお互い以外のものが必要です。私と貴方に働きかける仕掛け人の役目をするものが要ることになります。そこに人間の思考構造の中の父韻が登場します。

「注1」この便宜上という言葉は適当でない。実は難しい説明を省くためである。物の見方に二つある。相対観と絶対観である。主と客が対立し、その対立から物事の現象を考える立場を相対観という。これに対し、主と客の対立はそのままに、その主と客が一体となっている立場（主と客統合の立場）を絶対観という。この場合、主客未割のウをウとウの対立図として示すことは間違いとは言えない。例えば東と西が対立する冷戦の時代が長く続いた。これを東と西を一つと考える世界全体として捉えるとき、絶対観の立場が成立する。

では父韻の説明に入ります。

「古事記と言霊」島田正路氏著書より

次に成りませる神の名は、^{うひぢに}宇比地邇の神・^{いもすひぢに}妹須比智邇の神。次に^{つのぐい}角杵の神。次に^{いもいくぐい}妹活杵の神。次に^{おほとのぢ}意富斗能地の神。次に^{いもおほとのべ}妹大斗乃辨の神。次に^{おもだる}於母陀琉の神。次に^{いもあやしこね}妹阿夜訶志古泥の神。次に^{いやなぎ}伊耶那岐の神。次に^{かみ}伊耶那美^{かみ}の神。

父韻

古事記は豊雲野の神の次に宇比地邇の神から妹阿夜訶志古泥の神までの八神を挙げています。チイキミシリヒニの八音の言霊です。(Ti.Yi.Ki.Mi.Si.Ri.Hi.Ni) この八音の言霊がウウ・アワ・オヲ・エエと主客に対立している母音・半母音の宇宙に働きかけ、母音と半母音が噛み結ぶ、感応同交する事を可能にします。ウオアエ・ウヲワエの母音・半母音は人間の心がその中に生まれてくる大自然宇宙です。大自然だけでは「独神で身を隠していて」何の活動も起りません。そこに働きかけ母音と半母音を噛み合わせ結ばせる八つの音は大自然ではなく、大自然を見、聞き、考え、感じ、生活を創造していく人間の知性の根本律動とも言ったらよいものです。この八つの音を父韻と呼びます。

・ ・ その 120 に続く

次は神と呼ばれる父韻について

その 120 「古事記と言霊」島田正路氏著書より

この父韻の力動の型に八種類あります。チイキミシリヒニの八音で示します。この八音は古事記に「宇比地邇の神・妹須比智邇の神・・・」と書かれていますように妹背即ち夫婦・陰陽といった二音一組の四組から成っているのです。

科学的に表現しますと作用・反作用の関係と言ったらよいでしょうか。この作用・反作用の関係は

八音の力動の内容を説明の処で明らかにされます。

この純粹主体と客体とを結び合わせて、現象を生んでいく八つの父韻の存在は大昔から宗教・哲学書によって知らされてきました。例えば日本の神道では、「天之御柱（純粹主体）と国之御柱（純粹客体）とのあいだを渡す天の浮橋」と言い、仏教では「此岸より彼岸に渡す石橋」と喩えられています。また易教では乾兌離震巽坎艮坤の八卦で示して居りますし、キリスト教では「我が虹を雲の内に起こさん。是我と世との間の契約の徴なるべし」とエホバの虹という言葉で伝えています。このように聖書も伝えますように、黙ってお互いに後ろを向いている主体と客体に働きかけて、正面に向き合い、お互いに気持ちを交換し合う様に仕向ける人間創造知性の働きは、神から与えられた即ち生来人間が持っている八つの父韻以外にはありません。

「注1」 八父韻を示す古事記の八神は妹背の二神一組の四組の神であるので「耦生の八神」と呼ばれている。

ではこれら八つの父韻の言霊は、それぞれどんな働きをして主体と客体とを噛み結ばせるのでしょうか。八つの父韻を指し示す指月の指である古事記の神名の説明に入ることになります。実を言って主と客を結ぶ力動パターンなどと言いましても、心の中の奥の方で一瞬閃く火花のようなものですので、言葉で説明・表現することは至難の業なのです。

けれどもこの力動を知ってしまうと、古事記の太安万侶が実にうまい名前で実際の父韻という月を指さしたとか、と感心させられるのです。

うひぢに 宇比地邇の神

言霊チ：宇比地邇という漢字から宇（いえ）は地と比べて似て近いものだ、という意味が読み取れます。これだけでは神名が如何なる父韻の働きを表現しているか明らかではありません。宇比地邇の宇は「いえ」とか宇宙の事です。ここで「いえ」といえば勿論人間の心の家の事です。心の家は宇宙全体です。身体や物には障壁がありますが心にはそれがありません。思ったら直ぐに何処へでも

何時の時代にでも飛んでいけます。ですから心の家は宇宙全体です。その宇宙が地と比べて邇ちかい、と言うのです。天が地と比べて近い、とはどんな意味なのでしょう。

もう少し突っ込んで考えて見ましょう。心の宇宙といえば心全体と言うことです。それはまた一人の人間の人格全部ということにもなりましょう。それでは地とは何でしょうか。こころの宇宙が眼に見えないものとすれば、地とは目に見えるもの、現実的なもの、と言う意味にも取れます。そこで「心全体が地に近い」とは心全体人格全体がそのまま現象となって現われ来ること、の意味に取れます。言霊チとは宇宙全体がそのまま現象となって現れ出ようとする力動韻と言うことです。

たとえば明日大切な出来事を処理しなければならない、とします。どう対処したら良いか、なかなか考えがまとまりません。「ああでもない、こうでもない」とうとう夜中も過ぎてしまいました。その時ふと諦めの心が湧いてきました。「自分の力ではどうすることも出来ないのかも知れない、それなら、その場で当たって砕けろ」そうところが決まります。この「当たって砕けろ」は決して投げ

やりの気持ちではありません。成功する事を念願しながら、その場に臨んで自分の持っている力全部を総動員して事に当たろうと決心することです。このように何らの先入観も持たずに、全身全霊を以て事に当たろうとする瞬時の人間の創造意志の力動、これが父韻言霊チなのです。

・ ・ その 121 に続く

次は神と呼ばれる父韻について

その 121 「古事記と言霊」 島田正路氏著書より

いもすひちに
妹須比智邇の神

言霊イ：この言霊イのイはアイウエオのイではなく、ヤイユエヨのイであります。さて須比智邇の神には冠に妹の字が付いています。前の宇比地邇の神と妹背、陰陽・作用反作用の関係にあることを示しています。宇比地邇が宇宙全体がそのまま現象界に姿を現わす韻というなら、それと陰陽・作用反作用の関係となる動きとはどんなものなのでしょうか。

それは言霊チの宇宙が一瞬にして現象化する力動に対し、言霊イは「現れ出て来た動きの持続する働きの韻」ということが出来ます。パッと現われたものが弥栄に延び続く姿、と言ったら良いでしょうか。

神名を見ましょう。須比智邇は「須^{すべから}く智^ちに比ぶるに邇^{ちか}かるべし」と読めます。宇比地邇が地に比べているのに対し須比智邇は智に比べています。その違いは何でしょう。先の先入観を振り切って、清水の舞台から飛び降りるつもりで立ち向かう時は、一瞬大地を飲み込む勢いでぶつかりますが、いったん飛び降りてしまえば、後は相手との交渉は自分の持っている経験的知識をどう使うか、にかかって来ます。決意して飛び出す時が言霊チとすれば、飛び出した後は言霊イです。それは否応

なく自分の知恵に頼らざるを得ません。「須^{すべから}く智^ちに比べるに邇^{ちか}し」の神名はその事を指しています。

太刀を振りおろす瞬間が言霊チなら、振りおろされた太刀を持つてが何処までも相手に向かって延びていく様が言霊イということです。

以上言霊チ・イの二つの父韻の内容についてお話ししました。ご理解頂けたでありますでしょうか。先に古事記の神名はすべて言霊の内容を指し示す指月の指であると申しました。ですから指し示す指だけ見て居ても、それが指し示す実際の物事の内容は決して理解することは出来ません。と同様に言霊チ・イについてお話ししましたこの文章もまた指月の指なのです。文章についてご理解頂けた読者は更にそれを参考になさり、読者ご自身の生活や心理の中でその父韻の実際の姿を自覚なさってくださいを希望します。続いて言霊チ・イ以外の父韻のお話しを進める事にします。

・ ・ その 122 に続く

次は神と呼ばれる父韻について

その 122 「古事記と言霊」 島田正路氏著書より

次に角^{つのくい}杖の神。次に妹^{いも}活^{いく}杖^{くい}の神

言^{こと}霊^{たま}キ・ミ：言^{こと}霊^{たま}キ・ミを指さすこの二神の名前は比較的容易に理解できます。人間が生まれたときから授かっている天^{あま}与^よの判断^{はんぱん}力^{りき}・知^ち恵^えのことを宗教書では剣^{けん}とか杖^{じょう}とか、または杖^{じょう}・柱^{ちゆう}などと呼んでいます。人がこの世の中に一人生きて行くために頼りになる依^より代^{しろ}といった意味を持っています。

この判断力^{はんぱんりき}で人が生きるために必要な知識^{ちしき}・信条^{しんぎょう}・習慣^{じゆんぱん}等々を、角^{つの}を出^だすように搔^かき繰^くって自分の方に引き寄せてくる働^{はたら}きの力^{りき}が父^{ちち}韻^{いん}キであります。その働^{はたら}きとは反対^{はんたい}に、自^{みづか}らの判断^{はんぱん}力^{りき}によって(杖^{じょう})、生活^{せいかつ}を更に発展^{はつぜん}させようと世^よの中の種^{たね}々の物^{もの}に結^{むす}び付^けこうとする力^{りき}動^{どう}、これが活^{いく}杖^{くい}の神^{かみ}である言^{こと}霊^{たま}ミです。手^て蔓^{つる}・物^{もの}蔓^{つる}・金^{かね}蔓^{つる}・人^{ひと}蔓^{つる}手^て当^あたり次第^{しだい}に結^{むす}び付^けこうとする当^あ今^{いま}のう^うち政治^{せいざ}家^か気^き質^{しつ}を思^{おも}えば理^り解^{かい}が早^{はや}いでしょう。けれどこの力^{りき}動^{どう}は何^{なに}も政治^{せいざ}家^かだけのも^{もの}ではありませ^なせん。人^{ひと}間^まにとつてこの世^よに生^なきて行^いくのに最^{さい}も必要^{ひつやう}な創^{そう}造^{ぞう}意^い志^しのパ^ぱタ^たー^んな^なのです。

・ ・ その 123 続^つく

次^{つぎ}は神^{かみ}と呼^よばれる父^{ちち}韻^{いん}について

その 123 「古^こ事^じ記^きと^と言^{こと}霊^{たま}」 島^{しま}田^だ正^{せい}路^ろ氏^し著^{しやく}書^{しょ}よ^り

意^い富^ふ斗^と能^の地^ぢの神^{かみ}。次^{つぎ}に妹^{いも}大^{おほ}斗^と乃^の辨^べの神^{かみ}

言^{こと}霊^{たま}シ・リ：この神^{かみ}名^なから推^{おし}理^りして言^{こと}霊^{たま}の内容^{ないよう}に到^{たう}達^{たつ}することはほとん^{ほとん}ど不^ふ可^か能^{のう}に近^{ちか}いよ^うに思^{おも}わ^れま^す。けれどこの神^{かみ}名^なを基^きにして人^{ひと}が自^{みづか}分^{ぶん}自^{みづか}身^{しん}の心^{こころ}の内^{うち}の動^{どう}きを見^みつめ^て行^いきま^すと、言^{こと}霊^{たま}の^{内容}に^{行く}着^つくのも^{それ}ほ^ど難^{がた}い^{こと}ではありませ^なせん。

意^い富^ふ斗^と能^の地^ぢとは大^{おほ}いなる量^{りょう}りの働^{はたら}きの地^ぢと読^よめ^ます。人^{ひと}は物^{もの}事^{こと}がうま^く識^し別^{べつ}出^で来^こない^{とき}、あ^あこ^うか^と試^し行^{こう}錯^{さく}誤^ごし^ます。迷^{まよ}い努^ゆ力^{りき}し^た末^{すえ}や^つと理^り解^{かい}納^{なつ}得^{とく}し^て、言^{こと}葉^{えつ}終^{しゆう}わ^り、事^{こと}態^{たい}はこ^こで一^{いち}段^{だん}落^{らく}し^ます。静^{しず}ま^りま^す。静^{しず}ま^{った}のは何^{なに}もか^もな^くな^ってし^まった^事ではな^く、経^{けい}験^{げん}知^ち識^しと^{して}物^{もの}事^{こと}の^識別^{べつ}の^土台^{だい}とな^って^残る^{こと}です。その^土台^{だい}が^地です。働^{はたら}き(能^{のう})が^土台^{だい}とな^るよ^うに^静ま^るこ^と、^と受^うけ^取れ^るで^しょう。言^{こと}霊^{たま}シとは人^{ひと}の心^{こころ}の動^{どう}きが心^{こころ}の^中心^{しん}に^向か^って^静ま^り収^{しゆ}ま^る働^{はたら}きの^韻な^のです。

大^{おほ}斗^と乃^の辨^べとは大^{おほ}いなる量^{りょう}りのわ^きま^え、と読^よめ^ます。言^{こと}霊^{たま}シと^りは陰^{いん}陽^{やう}・作^{さく}用^{よう}反^{はん}作^{さく}用^{よう}の^関係^{けい}に^ある^こと^から^考え^ます^と、人^{ひと}間^まの^識別^{べつ}の^力(斗^と)が心^{こころ}の^宇宙^{しゆう}に^広が^りに^向か^って^活用^{よう}さ^れる^よう^な発^{はつ}展^{てん}伸^{しん}長^{ちやう}し^てい^く力^{りき}動^{どう}韻^{いん}と^みる^こと^が出^で来^こま^す。また言^{こと}霊^{たま}シの^行である^ラリ^ルレ^ロが^渦巻^まき^状・^螺旋^{せん}状^{じやう}の^動き^を表^{あらわ}す^こと^から、言^{こと}霊^{たま}シは^渦の^中心^{しん}に^向か^い言^{こと}霊^{たま}シは^渦の^外に^向か^って^働い^てい^きま^す。

・ ・ その 123 に^つ続^つく

次^{つぎ}は神^{かみ}と呼^よばれる父^{ちち}韻^{いん}について

その 124 「古^こ事^じ記^きと^と言^{こと}霊^{たま}」 島^{しま}田^だ正^{せい}路^ろ氏^し著^{しやく}書^{しょ}よ^り

おもたる
於母陀琉の神。次に妹阿夜訶志古泥の神

言靈ヒ・二：この二つの神名から容易に言靈の内容を推察出来ます。於母陀琉の神を日本書紀では

おもたるのみこと
面足尊と書いてありますように、表面（面）に完成する韻と言うことが出来ます。何が完成することなのか。人はその人の前で起っている物事を的確に把握する事が出来ず、思い悩む事があります。それが何かの瞬間に、事情が呑み込め、どういう事かの表現が頭の中ではっきりと出来上がることがあります。このように物事の事態をしっかりと把握してその言葉としての表現が心の表面に完成する働きの韻、これが言靈ヒであります。

この言靈ヒと妹背の関係にあります妹阿夜訶志古泥の神が指さす言靈二の内容はおのずと明らかであります。

阿夜訶志古泥とは「あやにかしこき音」の意味です。阿夜と夜の字が使われていることから、心の表面とは反対に心の中心部を暗示しています。心の底の部分に物事の原因となる音が煮詰まり成る韻、それが言靈二であります。

例を引いて見てみましょう。物事の実際の内容が理解でき、それをどう表現したらよいか、が言葉として完成し「分かった」と思って心が晴れやかになった。その時、同時に心の中心には己に次の事態の発生する根っことなるものが、何か知らないが煮詰まり成っていることです。その動きに於いて前者が言靈ヒであり、後者が言靈二の父韻であるわけです。

以上八つの父韻チイキシリヒニの内容とその指月の指となる古事記の神名についてお話してきました。お分かり頂けたでしょうか。この父韻については、先にお話ししましたように易で八卦と言ひ、仏教で石橋と呼び、キリスト教で神と人の間の契約の虹と表徴して、その存在にお言及はしているものの、その表現は飽くまで概念的・比喩的なもので、父韻の実体はここ数千年の謎とされて来たものなのです。またここにお話ししています言靈の学の中でも奥義と言って良い部分でありますので、読者におかれましても種々比喩で表現されます文章を参考に自分の心の中に踏み入って父韻の実際の姿を確認して頂きたいものであります。八つの父韻が理解されてきますと、人間の心の全構造の輪郭が略略見えてくることになります。

また次のようにいうことも出来ます。古事記の中に出てくる幾多の神様の名前は全て言靈の原理の内容を表徴するいわゆる「指月の指」でありますので、それら神様を担ぎ廻り、やれ御利益だ、崇敬せよ、と叫びましても、個人的に心を慰めるのに多少役立つかもしれませんが、それ以外何らの意味もないことでもあります。「あれが月ですよ」と指さすその指を云々しても何も始まるものでもありません。

それなら古事記神代の巻きにある神名は、古事記編纂者である太安万侶が言靈を表徴するために創作した名前なのか、と言うと層ではありません。日本史の年表に「645年、天皇記・国記消失」とあります。その時代までの古代の天皇家や国家の歴史の記録が消失してしまったのですが、その写しであると言われて民間に伝わる竹内古文書・大友文献やその他上記等を見ますと、古事記の神代の巻きにある神名と同じ名前の天皇名や人の名前が多数発見されることです。この事から太安万侶は言靈一つ一つに、その内容を表徴するいわゆる指月の指となるに適当な名前を選び神名として用いたに

違いありません。現代に生きる私達が自らの心の中に踏み入って一つ一つの言霊を確認する時、その表徴である神名が「なるほど」と首肯されることから、太安万侶の意図の正確さが証明されます。古事記編纂者は何故そのような、まどろこしい謎謎で言霊の原理を後世に伝えようとしたのか、その解説は後章に譲り、一先ず父韻の説明を終えます。

・ ・ その 125 に続く

次は神と呼ばれる父韻について

その 125 「古事記と言霊」 島田正路氏著書より

親音

い や な ぎ かみ 伊耶那岐の神。次に い ざ な み かみ 伊耶那美の神。

言霊イ・ヰ：先天宇宙の剖判が意識の原点である天の御中主の神・言霊ウから始まり、主体側の言霊アオエの母音、客体であるワヲエの半母音、それに母音・半母音を結んで目に見える現象を生むキッカケとなる八つの父韻チキミシリヒニが確認されました。先天を構成する十七の言霊のうち十五がで揃ったこととなります。残り二個の言霊が伊耶那岐・美の二神である言霊イ・ヰであります。ここで今まで出てきた言霊を振り返って考えて見ましょう。初め何もない宇宙が剖判を開始して次々と母音ウアオエと半母音ワヲエが確認され、次に双方を結ぶ八つの父韻のチキミシリヒニの働きが出てきました。この事について次のような疑問が出てくるのではないのでしょうか。言霊ウアオエ、ワヲエの母音・半母音は実在ですから、それ自体永久に存在する、ということは分かる。けれどもその双方に働きかけて現象を生む八つの父韻は、何故そのような働きかけの力を持っているのか、その原動力は何処から来るのかです。宇宙の実在に働きかける人間知性の原律と言われる八父韻力の出所は何か、ということです。そしてその疑問に根底から答えるのが言霊イ・ヰなのです。

人間の心の先天構造の宇宙剖判はこの十六・十七番目の伊耶那岐・美の言霊イ・ヰまで来て、人間の創造意志が「いざ」と発動されます。言霊イ・ヰは創造意志の宇宙です。そしてこの創造意志の働きが父韻チキミシリヒニなのであります。

「注1」 今は使われなくなったが、昔は「いざ」を去来と書いた。また去来を「こころ」とも読んだ。

伊耶那岐は心の名の気であり、伊耶那美は心の名の身ということである。心の名とはつまり言霊のことを指す。

・ ・ その 126 に続く

次は神と呼ばれる親音について

その 126 「古事記と言霊」 島田正路氏著書より